様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　６ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００５６４

研究課題名（和文）自然談話構造理解のための、音声・変異動態に基づいた談話標識の研究

研究課題名（英文）Research on discourse markers based on speech and variation dynamics for understanding natural discourse structure

研究代表者
甲田　直美（Koda, Naomi）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：４０３０３７６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：自然談話、特に相互作用のある自然談話の構造理解のために、音声・変異動態に基づいた談話標識の機能の解明を行った。実際に使用された言語としての談話標識を考えるならば、統語、韻律を含む多層的マルチモダリティのなかで、インタラクションにおける基本現象を生起環境とともに実証的に捉える必要がある。それぞれの談話標識が実際の会話で実現する際の音調、持続時間、パワー値等の音声情報のバリエーションや、強調や短縮といった語形変化を等閑視することなく、実現としての談話標識の機能を考察した。多様な語形変化の分布に、話者による談話機能の選択や動態変化のプロセスを見出し、変異から変化という動態の中で談話標識を捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
談話標識は多くのバリエーションを備えており、変化も著しい。例えば接続詞「だから」は「そうだから」の指示語が落ちたものである。近年多用される接続詞「なので」は規範に反するものと捉えられていたが発話間を埋めるかのごとく頻繁に生じる談話標識となった。本研究は発話の詳細な観察と、数千例を超える大規模データの両者から、談話標識のバリエーションと変化の関係を探った。日常耳にするこれらの語彙は、規範と現実の間で揺れ動きながらも効果的な伝達や演出を求める話者によって使われ、定着していく。日常の言語学として捉えるところに本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In order to understand the structure of natural discourse, especially interacting natural discourse, the function of discourse markers based on speech and variation dynamics was elucidated. It is necessary to empirically capture the basic phenomena of discourse markers in interaction in a multilayered multimodality, including syntax and prosody, as well as the environment in which they occur. The function of discourse markers as realizations was examined without neglecting the variations in tone, duration, power value, and other phonetic information. Each discourse markers are realized in actual speech, as well as word form changes such as stress and contraction. We found a process of selection of discourse function and dynamic change by speakers in the distribution of various word form variations, and captured discourse markers in the dynamics of variation to change.

研究分野：言語学

キーワード：談話標識　言語変化　変異　自然談話　接続詞　感動詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

談話標識は、実質的意味が希薄なため、情報としての伝達内容にさほど影響を及ぼさないと見なされてきたが、自発談話内での言語と認知構造の関係、発話メカニズムの解明のためには必須の語類である。しかし、従来の研究では整えられた文の中での談話標識を扱ったものが多い。会話分析等の言語を抽象化しないアプローチや音声解析、ビデオ等を用いたマルチモーダルな観察によって、文字によって抽象化された談話標識から実際場面での変異動態、インタラクションにおける生起環境を探る道が拓けた。

２．研究の目的

自然談話、特に相互作用のある自然談話の構造理解のために、音声・変異動態に基づいた談話標識の機能の解明を行う。実際に使用された言語としての談話標識を考えるならば、統語、韻律を含む多層的マルチモダリティのなかで、インタラクションにおける基本現象を生起環境とともに実証的に捉える必要がある。それぞれの談話標識が実際の会話で実現する際の音調、持続時間、パワー値等の音声情報のバリエーションや、強調や短縮といった語形変化を等閑視することなく、実現としての談話標識の機能を解明する。多様な語形変化の分布に、話者による談話機能の選択や動態変化のプロセスを見出し、変異から変化という動態の中での談話標識の機能の解明を目指す。

３．研究の方法

映像と非圧縮音声を含んだ自然談話データに基づいて、談話標識に特化してその音声特徴を用いながら談話機能を解明し、その変異形態のバリエーションと機能との相関を得る。談話標識の項目選定は、すでに資料が文字化しているため使用頻度と出現環境については検索が可能な状態である。しかしながら、変異形態のバリエーションを採取するにあたり、申請時に保有するデータは社会/地域変種や使用場面を考慮したデータとは言いがたかった。そのため、自然談話データの拡充を行う必要がある。手順としては、まず自然談話資料を拡充し、そこから談話標識を含む発話連鎖について生起環境の整理と多様なバリエーションを記述する。自発的自然談話における談話標識としての言語指標の整理→非圧縮音声切り出しによる音声データストックの作成→精密な音声記述の蓄積→句末境界音調、持続時間、F0 値、パワー値、話速等の実測データを整理→発話連鎖における発話交替や発話重複、発話の途切れ等、会話構造に基づいた音声言語としての談話標識の機能の解明→バリエーションの選択と使用環境の考察→発話理解と発話生成メカニズムの解明の基盤的研究を行う。書記言語に見られる完全･完結･明瞭･加工性(Biber, 1988, Variation across Speech and Writing)の対極軸として、自然談話における言いさし、言い淀み、オーバーラップ、言い誤り、倒置等の現象における談話標識の機能を整理する。会話内部での対人調整、情報提示、語りなどフロアの継続、二人対話と多人数会話における変数の区別等の考慮が必要であり、自然談話に見られる言語特徴を取り出すためには、発話の性格に配慮する必要がある。息継ぎのように汎言語的な特徴に対し、節連鎖（clause chaining）構造（岩崎・大野(2007)「「即自文」･「非即自文」」）とされる、接続助詞が鎖のように続く現象や、Intonation Unit の細切れ性、短いターン移行時間(Stivers et al., 2009, Universals and cultural variation in turn-taking in conversation.)など、日本語の特徴とともに検証される必要がある。接続助詞と接続詞は複合ターンの形成に寄与しており、IU 間の連鎖を見る上でも有用である。また IU の先頭部分でストレスの置かれない後の連続(anacrusis)が普通より早い速度で軽く発話される「いや、でも」など応答詞と接続詞との連続では単独の IU を構成しない場合もある。このような話し言葉を特徴付ける要素の中で談話標識がどのように用いられ、話者がどのような語形を選択しているのか、その動態を記述する。

４．研究成果

日本語のバリエーションを考察するため、『生活を伝える被災地方言会話集』をもとに宮城県気仙沼方言話者の会話における接続詞を分析した。この会話集にはさまざまな場面会話が収録されており、交渉、ゆずりあい、挨拶、弔いなど、生活に根ざしたさまざまなコミュニケーション場面における言語使用を観察することができる。接続詞は指示詞や提示語，代名詞と同様、実際の使用場面では、多様な音形で発話される。このような特徴のために、接続詞は一語としての認定、定着度に幅があるが、広くその語形を収集し分析を行った。全国的にも「方言音韻総覧」（『日本方言大辞典』，1989 所収)の記載にあるように、ソシテ→ホシテ，ソレ→ホレのように s→h の対応や，ソシタラ→ソイタラ（サ行イ音便）などが指摘されており、ある文脈上で，どのような音形で出現したか，それを詳細に観察・記述することが重要である(甲田 2018)。気仙沼方言の特色としてダカラ類とソレデ類について検討した。ダカラ類（そのバリエーションとしてンダカラ、ホンダカラ等が見られ、カが濁音ガとなるものもあるが、ダカラ類として記す）が相手の発話への同意・共感を表す用法をもとに、接続詞の機能が前後の論理関係を表すというよりは、独立して同意の応答や相手との共感を表す事例を文脈、音声特徴とともに分析した。会話に

おける接続詞の用法のうち、接続詞でありながら後件を伴わずに独立した単位で機能する用法があること、そしてそれは接続詞であることによって、他の感動詞では担えない表現効果を持つことを指摘した。

日常会話における接続詞の使用実態について、話者交替上の基本単位であるターン構成単位をもとに一発話を捉え、そこにおける接続詞の位置と機能の関係を探った。接続詞はターン構成単位の①冒頭、②途中、③末尾、④単独、⑤相手の発話途中での割り込みの部分に位置していた。ターン冒頭における接続詞は、相手発話への反応や、談話境界の開始に用いられていた。ターン途中では、意味関係を明示するというよりも言葉探しの穴埋めに用いられていた。ターン末尾では述語末や終助詞などの文法的完了点を過ぎて接続詞が配置されるが、このときの韻律的特徴と意味機能の対応を分析した。会話での接続詞は前後件の関係を明示するというよりも、さまざまな位置において用いられ、談話標識やフィラー、末尾辞のように用いられていた。地域に特定した事例研究として、気仙沼方言会話における接続詞の分析を通して、接続詞が相手の発話への同意や辞去の挨拶など、生活のコミュニケーション場面において重要な役割を果たしていることをみてきた。気仙沼方言において共通語にみられない用法を指摘し、ダカラ類が前後件を伴わず単独で用いられ、同意表現として機能することや、ソレデ類が会話での受け渡しに用いられ、相手の発話に融合的視点で関連付ける用法や辞去の挨拶としての用法を考察した。これらは会話において接続詞がその表現効果を発揮した事例である。接続詞が用いられた文脈や音声特徴の分析により、音調や引き延ばしの長さによって接続詞が話者の感情を巧みに伝えているという、情意の接続詞としての用法をみた。このような事例では接続詞は感動詞化している。接続詞が元来持つ、前後件の関係を表すという機能が、相手の発話に同意したり、自らの視点の採り方を位置づけたりすることに用いられている。

自然会話の中で、場面を横断して用いられる談話標識について検討した。まず、強調や応答に使われる談話標識について考察を行った。「本当」「実は」「実際」「確かに」など、「真実性」に言及する談話標識が会話でどのように用いられているか考察した。強意、賛同、相づちとして用いられ、会話相手への強い賛同や、話者の主張を強調する際に用いられていた。真実性を何に用いるかという点では、逆接表現との共起が顕著だった。対比や譲歩で多いこと（何に用いられるか）をコーパスから実証した。真実性の標識が特定の構文で好んで用いられることを示し、それぞれをグライスの理論と対応づけた。真実性の標識は、あえてメタ的にそれが事実とマークするということは、有標であり、その発言自体が何らかの企みをもっている。あえてメタ的に確信や信憑性について言及するということは、単に事実というのではなくて、その後に言いたいことが述べられる。例えば戦う議論の前提では、前提としての「真実」として共有し、その後で主張が展開される。主張を展開するために、会話相手と共有したい真実性や事実性を、これらの標識でマークし相手に示す。さらに、前の表現に後から何かを付け加える表現「ただ」「実は」について、それぞれが担う配慮について、前後件の関係から考察した。「ただ」によって主張を限定させて後ろから付加することにより、相手の主張を否定せず、配慮した言い方となっていた。「実は」は背後にある理由を相手と共有することで配慮を示していた。「実は」は談話の範囲のその部分にのみ、あえて事「実」だと表示することによって、その部分が特別な事情であることを相手と共有する。どちらも談話内での機能を援用して、前後の文脈の受け渡しの中で配慮を示す標識として用いられていた。

一定の共時態における談話標識と接続詞のバリエーションから動態変化を探った。言語の中には、言語変化しやすいものとしにくいものがある。接続詞のうち、原因理由、逆接、仮定条件は変化しやすいが、添加、列記は変化しにくい。これは、相手との相互作用のためにより効果的な表現を求めるため変化しやすいからである。各地の方言談話で接続詞に共通語形が現れ、接続助詞で方言形が用いられるのは接続詞が単独で談話標識として用いられるため、入れ替えやすいからだと考えられる。甲田（2018）で検討した方言談話における接続詞のバリエーションの多少が、これまで多く指摘されている言語変化の動向と対応するということについて全体像を探った。　接続表現の変化を考えるとき、使用年代の異なるデータを比較する方法があるが、同一の話者、ジャンル、話題、使用場面等を均質にして比較することは困難である。近年、電子化コーパスの拡充により、接続表現と文体特徴との相関について分析が進められている。そこで明らかになったことは、文体特徴は単に話し言葉-対-書き言葉のような単純なものではなく、柏野(2013)にあるように「専門度」「客観度」「硬度」「くだけ度」「語りかけ性度」等の要素が絡まったものであるということである。これらの研究から、たとえ書き言葉という共通した媒体であっても使用年代の推移ごとに比較しただけでは言語変化の実態を捉えることはできないものと思われる。ある一定の共時態データにおける談話標識、接続詞、接続助詞を観察することで、そこに見られる接続表現のバリエーションから変化の様態を探る可能性について論じた。これまで扱ったデータを含めて検討し、全体的見通しを得た。

一部の接続詞は、前後の表現間の関係を明示するだけではなく、会話内で応答や言いよどみなど、感動詞のように機能することがある。副詞「本当(に)」「確かに」も同様に、副詞としてだけではなく、応答表現として用いられる場合がある。これは、相手との相互作用のために、より

効果的な表現を求め、これらの表現が用いられると考えられる。　会話では相手との一致を大きくするために、配慮上、より強い表現が求められる。「はい」「うん」などの相槌では強い同意を表すことができず、これらの真実性を表す副詞が応答に用いられる。談話標識は、ある表現が流行ると話者は頻繁にそれを使用する。BTSJ 自然会話コーパスをもとに調査したところ、これらの応答詞としての使用には男女差が見られた。このことから、ある一定の共時態データにおける談話標識、接続詞、接続助詞を属性、場面別に観察することで、そこに見られる接続表現のバリエーションから変化の様態を探る可能性について論じた。　また、日本語と英語との対照を行い、応答用法においては、certainly, exactlyなどが確からしさを表す副詞としては用いられるが、日本語のように応答として多く用いられることは英語のコーパスからは確認できないことを指摘した。これを慣習化の違いとして位置づけた。これまで扱ったデータを含めて検討し、全体的見通しを得た。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 甲田直美	４．巻 -
２．論文標題 真実性に言及する談話標識	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『語彙論と文法論をつなぐ－言語研究の拡がりを見据えて－』	６．最初と最後の頁 153-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 甲田直美	４．巻 10
２．論文標題 後回しの配慮―注釈の談話標識「ただ」「実は」―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語コミュニケーション研究	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 甲田直美	４．巻 －
２．論文標題 感動詞化する接続詞－コミュニケーションにおけるソレデ類、ダカラ類－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 小林隆（編）『生活を伝える方言会話』ひつじ書房	６．最初と最後の頁 127-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 甲田直美	４．巻 －
２．論文標題 非漢字系上級学習者の動的な読解過程	５．発行年 2019年
３．雑誌名 野田尚史（編）『日本語学習者の読解過程の研究方法と研究課題』	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 甲田直美	4．巻 69
2．論文標題 連鎖する語り	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東北大学文学研究科研究年報	6．最初と最後の頁 166-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 甲田直美	4．巻 -
2．論文標題 接続詞の語形変化と音変化　―方言談話資料からみた接続詞のバリエーション―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 コミュニケーションの方言学	6．最初と最後の頁 271-291
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 甲田直美
2．発表標題 談話標識と配慮
3．学会等名 日本語コミュニケーション研究会
4．発表年 2023年

1．発表者名 甲田直美
2．発表標題 ことばの研究者は談話研究にどう接近するか―定延利之氏、野田尚史氏へのコメント―
3．学会等名 日本語学会2021年度春季大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 Yamaoka, Masaki and Koda, Naomi
２．発表標題 Considerate Expression In and Across Cultures: The Outline of Considerate Expressions.
３．学会等名 17th International Pragmatics Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 甲田直美
２．発表標題 日本語の標本化はどこまで可能か－コーパス研究の現状と問題点－
３．学会等名 2021東北アジア国際言語文化研究基地集会基調講演（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Naomi Koda
２．発表標題 Two trajectories of changes on Japanese causal conjunction: Morpho-phonetic variants and discourse-pragmatic function
３．学会等名 Discourse-Pragmatic Variation and Change (DiPVaC) 5（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 甲田直美
２．発表標題 接続表現における動態変化
３．学会等名 社会言語科学会第46回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 甲田直美
２．発表標題 真実性の談話標識と配慮
３．学会等名 第11回日本語コミュニケーション研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 甲田直美
２．発表標題 談話標識の出現傾向からみた会話の特性ーBTSJコーパスからー
３．学会等名 国立国語研究所シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！－『BTSJ日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方－」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 甲田直美
２．発表標題 英語の配慮表現
３．学会等名 語用論学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 甲田直美	４．発行年 2023年
２．出版社 東北大学出版会	５．総ページ数 167
３．書名 語りの力	

１．著者名 児玉一宏（編）甲田直美	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 265
３．書名 はじめて学ぶ認知言語学	

１．著者名 森山卓郎・渋谷勝己（編）甲田直美	４．発行年 2020年
２．出版社 三省堂	５．総ページ数 208
３．書名 明解日本語学辞典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
エジプト	カイロ大学			
中国	北京大学			